

## 中国における S. R. ブラウンの活動

千葉謙悟

要旨 本稿はアメリカ人宣教師ブラウン (Samuel Robbins Brown, 鮑留雲／勃朗, 1810-80) の中国時代に焦点を当ててその活動について考証し、特に中国で培った在中英米人とのネットワークについて検討した。以下ではまずブラウンの生涯を概観し、次いで同僚や先輩、学生たちと良好な関係を築く上で助けとなったブラウンの性格を描写した。本論ではさらに以下のことを指摘した。ブリッジマン、ウィリアムズといった先輩格の来華アメリカ人宣教師や、同じ船で来華した同輩の宣教師たちと、ブラウンは極めて良好な関係を築いていた。特にウィリアムズと来華当初は同居しており、ブラウンの日本への関心は日本語学習に熱心だったウィリアムズから得た可能性がある。ブラウンはレッグの対訳例文集 *Lexilogus* (1841) の編纂に協力したのみならず、それに基づく独自の英語教科書をも編纂していたようであり、この経験は彼の主著 *Colloquial Japanese* (1863) 編纂の土台となっただろう。またブラウンは中国伝道を経済的に支える実業家たちとも良好な関係を維持しており、『致富新書』の出版費用も彼らに負担してもらっていた。ブラウンが赴任したモリソン記念学院では、一部の学生の振る舞いが学院の評判に影響し学校経営にすら影を落とした。この教訓はブラウンの後の日本における学校経営に影響を与えたかもしれない。最後に『致富新書』に関するいくつかの問題について初歩的な検討を加えた。

キーワード S. R. ブラウン 中国伝道 来日宣教師 モリソン記念学院

### 鮑留云 (Samuel Robbins Brown) 在华活動考略

提要 本文以与在华英美人的际关系为焦点考察了美国传教士鮑留云

(Samuel Robbins Brown, 1810–80) 在华时期的活动。本文首先描写了鲍留云的生平，指出他明朗开阔的个人风格有助于和同事和学生保持良好关系。例如，鲍留云和美国来华传教士裨治文、卫三畏以及其他乘坐同一船只航海的美国人结交，成为了好友。尤其是鲍留云夫妻与卫三畏之间的关系特别良好，鲍氏来华之际暂时寄寓于卫三畏寓所。卫氏当时热衷于日语学习，因此鲍留云对日本的关心可能首先萌芽于卫三畏家。其次，本文指出鲍留云不但为英国来华传教士理雅阁协助编写多语言教科书 *Lexilogus* (1841)，而且似是独自编写了基于此书的英语教科书。这个经验为他旅日时期编写的 *Colloquial Japanese* (1863) 提供了重要基础。至于经济方面，他的性格使实业家以及政治家保持良好关系，他们慷慨地为鲍氏捐款，成为了传道活动的经济支撑。鲍留云的汉文经济学译著《致富新书》是由一位匿名绅士来负担出版经费而出版的。至于教育方面，鲍留云为马礼逊纪念学校奋斗，但部分学生的行为伤害了学校的评价，甚至影响到了其经营。这个教训会对鲍氏在日本的学校经营影响到的。最后本文对《致富新书》的成书过程加以初步探讨。

关键词 鲍留云 中国传道 来日传教士 马礼逊纪念学校

## はじめに

本稿ではアメリカ人宣教師ブラウン（中国名鮑留雲／勃朗<sup>1)</sup>，1810–80）の中国時代に焦点を当て、その活動とそこで培った在中英米人とのネットワークおよび『致富新書』（1847）の若干の点について検討する。

ブラウンは周知の通り50代からの日本伝道で多くの成果を取めたため、これまでは日本での伝道活動に焦点が当てられてきた。日本語学では、19世紀後半の日本語を知る重要資料として *Colloquial Japanese* (1863) および *Prendergast's Mastery System* (1875) といった日本語教材の著者としても知られるところである。

しかしブラウンの生涯についてより広い視野から検討するならば、若き日

---

1) 「鮑留雲」がブラウンを指すかどうかこれまで懐疑的な見方もあったが、先行研究および本特集所収の各論考から「鮑留雲」がブラウンを指すことは確実だろう。

のブラウンが構築した在中英米人のネットワークの検討の必要性がうかびあがる。これは後年の日本での活躍の基礎となった。例えば来日当初、ブラウンの日本語学習には中国で親しくなった同じアメリカ人宣教師の助けがあった。加えて、ブラウンの日本への関心はそもそも中国時代に芽生えたものなのである。

初期の来日宣教師はそれ以前に来華経験のあることが少なくない。しかし彼らは若年で来華した後、種々の理由から伝道活動を断念して一度帰国していることがほとんどであった。それゆえ中国での活動に目立ったものはなく、中国キリスト教史からはほぼ注目されない存在であった<sup>2)</sup>。例えば19世紀前半の来華プロテスタント宣教師の伝記資料として重要な Wylie (1867) にブラウンは立項されていない。

中国側のブラウンへの関心は2つの潮流が存在しているように見える。一つはブラウンが容閔の教師であるという事実から出発してその生涯や教育業績を考証する流れである。容閔 (1828-1912) は中国におけるブラウンの学生であり、1847年のブラウンの帰国に同行した。容閔はブラウンの故郷マンソンで就学し、最終的にはイエール大学を卒業することになる。もう一つはブラウンの『致富新書』を中国における近代経済学の紹介と受容の歴史の中に位置づける流れである<sup>3)</sup>。

ただ、日中いずれの研究状況においても、日中双方に深くかかわったブラウンの70年の生涯をトータルに把握しようという動きは見いだせない。そこで、本稿はそのような間隙を埋め、ブラウン自身および『致富新書』出版

---

2) 最近ではキリスト教史および西洋人による中国語研究史の立場から、日本で活躍した宣教師の中国時代への注目が見られる。ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) の中国伝道に対する佐々木 (1998, 1999)、およびサマーズ (James Summers, 1821-91) の中国語研究に対する『日中語彙研究』8号 (2019) 所載の各論考、特に千叶 (2019, 2021) が挙げられよう。

3) 前者の代表的な論考には、ブラウンと『致富新書』について考証した呉義雄 (2011) がある。後者の論考には経済学史の立場から李丹 (2011, 2015) をはじめとする論考がいくつかあるが、いずれも学史の一環として触れるのみであり、『致富新書』を主たる検討対象としているわけではない。

の背景を解明する上での基礎的な知見を提供したい。

## 1. ブラウンの生平と性格

### 1.1 ブラウンの生平

ブラウンは1810年6月16日にアメリカのコネチカット州イーストウィンザー (East Windsor) に生まれ、8歳でマサチューセッツ州マンソン (Monson) に移り、現地のマンソン・アカデミーからアマースト大学 (中退)、次いでイエール大学に進んだ。1832年にイエールを卒業後、サウスカロライナ的女子校やニューヨークの聾啞学校で教歴を積んだ。このときすでに教師としての評判は良好であったという。1836年にニューヨークのユニオン神学校に入学した。1838年10月の卒業間近にマカオのモリソン教育会 (Morrison Educational Society) からの招聘を受諾したため、卒業後ただちに結婚し、牧師および学院の専任教師として夫人とともに中国へ赴いた。1839年2月にマカオに到着して業務を開始、1841年にシンガポールを訪れた際にはヘボン夫妻に会っている。言うまでもなく、ヘボンとは後に日本で同僚となりその関係は生涯続いた。モリソン教育会によるモリソン記念学院 (Morrison Memorial School) での教育に尽力し、1842年には校舎をマカオからイギリスが新たに獲得した香港に移した。その後しばらく学院の教育責任者として事業に献身するが、夫人の健康上の理由から1847年に離任して帰国した。その際に黄寛、黄勝、容閔の3人の中国人学生を伴い、彼らをマンソン・アカデミーに入学させた<sup>4)</sup>。帰国後は約10年間にわたってニューヨークで牧師兼教育者として奉仕していたが、1859年5月に日本伝道に出発した。1867～69年の一時帰国を除いて約20年を日本で過ごし、1879年に帰国、

---

4) 黄寛 (1829-78) はマンソン・アカデミー卒業後にスコットランドに移りエディンバラ大学で医師の資格を取った。中国人で最初期に英国の医師資格を得た人物である。黄勝 (1827-1902) は病によりアメリカでの学業を中断して香港に戻ったが、ジャーナリスト、外交官、香港政庁の中国人立法委員などを歴任した。容閔は留美幼童事業に関わり、外交官また実業家として知られる。

翌年 6 月 20 日にマサチューセッツで没した。

## 1.2 ブラウンの性格

ブラウンは1838年10月にニューヨークを発ち、アフリカとインドを周ってマカオを目指した。船中では同じ中国伝道に向かう3人のアメリカ人宣教師と一緒にあったが、彼らとは道中親交を深め、中国到着後も良き同僚として伝道事業に奉仕した。同行者の一人アビール (David Abeel, 1804-46) は「私は今よりも気の合う同伴者を持つてとは思わない」とまで書き送っている<sup>5)</sup>。

ブラウンについて述べる文献のすべてがその愛される性格に触れる。社会的で楽器も歌も上手く、学校では生徒の人気と信頼を勝ち得た上に、教会や学校のために広く寄付金を集め経営する世俗的な才覚もあった。彼の甥による回想では「衰えることのない奉仕の気持ちと多様な経験を経た生涯を通して、ブラウン博士は友好的な気質と陽気な性格を持った人物として知られていました。彼は若い人にも年老いた人にも、魅力的な相手でした。彼は身分の高い人とも低い人とも、どうつきあえばいいのか知っていました」と、その生涯を通じて社会的で明るい性格の人物として描かれる<sup>6)</sup>。アビールもブラウンのことを「彼とその妻は感じが良く、知的で敬虔である。彼らは非常によい伝道をするだろう」と評していた。

ブラウンは幼年期から青年期にかけては経済的に恵まれない時期が続いたが、大学時代からすでに「慧眼と言語に対する敏捷な心を持っていたので、彼はクラスで受けがよかった。……社交上のあつまりは若いブラウンが出席しなければ、ほとんどなりたたなかつたのである<sup>7)</sup>」といわれていた。中国におけるブラウンの生徒である容閔は、ブラウンのことを「沈着な性質で、

---

5) Williamson (1848: 171)。

6) 明治学院歴史資料館 (2009: 50)。対応する英語原文は同書135ページ。

7) グリフィス (1985: 34-35)。「言語に対する敏捷な心」は中国語、日本語を学ぶ上でも役立っただろう。ブラウンの外国語聴取力は、来華してわずか2年で広州城内とは異なる地域の粵語音を聞き取って記述できるほどであった。吉川 (2011: 407) 参照。

事を処するには柔軟な手段を用い、高雅温情なのに加えて、いくぶん樂觀的な風があった。……少年というものの本性を理解していたので、中国人だろうが、日本人だろうが、アメリカ人だろうが、少年をどう教えたらいいかを心得ていたのだ」と評し、「天賦の才腕と性格からみて最適任の名校長」と絶賛している<sup>8)</sup>。

ブラウンは音楽にも長けていた。アピールは「彼 [=ブラウン。千葉注] は歌がすばらしく上手で、いくつか楽器もできる。セラフィム [グラスハーブのこと。千葉注]、バス・ヴィオラ、フルート、ヴァイオリンは、一度に全部はできないものの、みな求めに応じてできる」と述べている<sup>9)</sup>。音楽はブラウンが中国人の若者を教育するときにも生徒の人気を得る上で役立った。日本においてもブラウンが声楽と器楽の両面で才能を示したことは多数の証言がある。

## 2. 中国でのネットワーク

### 2.1 来華宣教師

中国にはすでにアメリカ人初のプロテスタント宣教師としてブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman, 裨治文, 1801-61) が1830年2月に赴任し、印刷工としてウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 威三畏, 1812-84) が1833年10月に続いていた。同じアメリカ人ということもあってか、ブリッジマンとウィリアムズの関係は良好であったようだ<sup>10)</sup>。ブラウンとブリッジマン、ウィリアムズとの友情は生涯にわたって続いた。ブラウンは来日後も頻繁に中国と日本を行き来しているが、上海の美華書館 (American Presbyterian

---

8) 容閔 (1969: 18)。

9) Williamson (1848: 171)。

10) ウィリアムズ (2008: 67)。またウィリアムズは同じページで「偉大なあの英国人宣教師、モリソン博士と、性格的に似ていないことはないブリッジマン氏であったが、知的要素と記憶力にかけては、比較にならないほどで、抜群だった。それも、大学教育の幅広い教養と専門教育を受けているので、一層の磨きがかかっていた」と高く評価している。総じてウィリアムズのモリソンに対する評価は (敬意を保ちつつも) 厳しい。

Mission Press) で彼の日本語教本 *Colloquial Japanese* の印刷の準備を整えるべく 1861 年に上海を訪れた際、ブラウンはちょうど上海で病床にあったブリッジマンの臨終をみとどけ、その遺言により葬儀を取り仕切っている。ブラウンとブリッジマンとの友情から、人々はそれがふさわしいことと受け止めたと伝わる<sup>11)</sup>。

一方、ブラウン夫妻がニューヨークからマカオに到着したとき船まで出迎え、通関手続きを行ったのはウィリアムズであった。ブラウン夫妻はマカオ到着後 7 ヶ月にわたりマカオのウィリアムズ宅に寄寓して中国語の初歩を学んでいる。

注目すべきは、ブラウンが日本に興味を持つようになったのはウィリアムズの影響である可能性が高いことであろう。ウィリアムズは遅くとも 1836 年には日本人と接触があった<sup>12)</sup>。彼らはドイツ人宣教師ギュッツラフ (Karl Friedrich August Gützlaff, 郭実獵, 1803-51) のもとに預けられていた日本人漂流者であり、ウィリアムズは将来的な日本伝道の可能性を感じ、彼らから日本語を習い始めたのである。1837 年の漂流民返還事業 (日本ではいわゆるモリソン号事件) に同行して琉球を訪れた際、ウィリアムズは自身の官話と日本語が琉球で通用したと記している<sup>13)</sup>。

またウィリアムズは日本人漂流者たちを協力者として創世記、マタイ福音書、ヨハネ福音書などを日本語に訳し、簡単な日本語の語彙集も編纂した<sup>14)</sup>。ウィリアムズ宅には日本人漂流者が毎日数時間にわたって日本語を教えるために来訪しており、ウィリアムズ本人もこのころは熱心に学んでいたようである<sup>15)</sup>。以上から、ウィリアムズ宅に寄宿していたブラウンにも当然に彼らと接触する機会があっただろう。

---

11) Lazich (2000: 384)。

12) ウィリアムズ (2008: 94)。

13) ウィリアムズ (2008: 108)。

14) ウィリアムズ (2008: 113-114)。これらすべては 1856 年 12 月 14 日の広州十三行商館街の火災で失われた。

15) ウィリアムズ (2008: 114, 125-126)。

なお、1859年にブラウンが日本伝道を開始したことを中国で伝え聞いて、ウィリアムズは自身の日本語学習経験や資料をブラウンに伝え、それが役立つことを希望している<sup>16)</sup>。ブラウンは日本に向かう船中で、多少の日本語学習経験を持つゆえに同行の日本伝道に向かう宣教師を指導したが、その学習経験とはブラウンが中国時代にウィリアムズやそこにいた日本人漂流民から日本語を学んだ状況を指すものと解してよいだろう。

## 2.2 実業家・政治家

ブラウンの社交的な性格は、伝道事業を経済的に支える商人たちの寄付や援助を引き出す上でも役に立った。「彼は実務家の真価を認め、彼らを自分の仲間、また協力者とみなすことを学んだのである。……また……宣教師と商人をひとつに結びつけて奉仕をさせ、さらに、ミッションの大問題のひとつを解決する助けとなったのである」と伝記作家グリフィスが述べるとおりである<sup>17)</sup>。「ミッションの大問題」というのが経済的な問題であることはいうまでもない。

さらに、後述する『致富新書』の出版費用も実業家からの直接の寄付によってまかなっていた。「広州在住のとある紳士の厚意により、翻訳と印刷の費用は支払ってもらった」<sup>18)</sup>とある。

また社交的なブラウンは、西洋人であると中国人であるとを問わず政治家との交際もいとわなかった。政治家との交友関係はしばしば伝道事業に有利に働くことがあった。例えばブラウンの属するモリソン教育会は、アヘン戦争後に香港総督ポッティンジャー (Henry Pottinger, 1789-1856) から香港島北部の丘を一つ与えられ、さらに実業家のデント (Lancelot Dent, 1799-1853) から学校施設の建設費として3000ドルを支給された<sup>19)</sup>。この丘は香港に「摩理臣山 (Morrison Hill)」として現存する。

---

16) ウィリアムズ (2008: 377-78)。

17) グリフィス (1985: 38)。

18) Chinese Repository Vol. XV Dec. 1846, p. 608.

19) グリフィス (1985: 62)。



ブラウンと交流のあった中国側の政治家として林則徐（1785–1850）が挙げられる。林則徐はアヘン戦争前に海外事情を知るべく、当時は稀少であった英語を解する中国人を集めてマリー（Hugh Murray, 1779–1846）の *The Encyclopaedia of Geography*（1834）を抄訳させた。これは後に『四洲志』（1839 頃）という文献にまとめられているが、このマリーの原本は他ならぬブラウンから入手していたのである<sup>20</sup>。『四洲志』はアヘン戦争後に林則徐から魏源に託されて『海国図志』の元となったとされ、中国近代史上にきわめて重要な位置を占める。中国キリスト教史では注目されない人物が歴史上重要な役割を果たしていた例といえるだろう。

### 3. ブラウンの働き

#### 3.1 教科書

ブラウンは若いときに多少日本語に触れたことがあるおかげか、来日してわずか2年で主著とされる日本語教科書 *Colloquial Japanese* を上梓した。この迅速な執筆と出版には後述するようなブラウンの語学的才能も当然にあずかっているだろうが、ブラウンにとってこの日本語教科書が初めての執筆経験だったわけではない、ということも有利に働いたであろう。また、実は *Colloquial Japanese* は完全なゼロの状態から編纂を開始したわけではなく、その少なくとも一部には元となった教科書が存在する。しかもブラウンはその教科書の編纂に協力していたのである。

それはマラッカにあった Anglo-Chinese College（英華書院）の院長であった英国人來華宣教師レッグ（James Legge, 理雅閣, 1815–97）が出版した *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages: Comprehending the Vernacular Idioms of the Last in the Hok-keen and Canton Dialects*（1841）という対訳例文集である。これは粵語と閩語を学ぶため、粵語・閩語・官話・英語・マレー語の例文を対照できるようにしたフレーズ集である。ブラウンは *Lexilogus* のう

---

20) 邹振环（2020: 89）。なお『四洲志』の成書年代には諸説あり、まだ決着をみない。

ち粵語部分のローマ字による記音を担当した。吉川（2011: 407）が指摘するように、ブラウンは来華してわずか2年ほどで粵語内部の音声的差異を聞き取り *Lexilogus* に反映させるほどの言語能力を示している。この言語能力は上述のように *Colloquial Japanese* を編纂する上でも役だっただろう。ブラウンの *Colloquial Japanese* のうち、少なくとも会話文集はこの *Lexilogus* を基として編集されていることがわかっている<sup>21)</sup>。

興味深いことに、ブラウンは *Lexilogus* の編集に協力するだけでなく、*Lexilogus* に基づく英語教科書をも独自に編纂したようである。19世紀前半の中国人向け英語テキストは多くの場合、英語話者向けの中国語テキストとしての機能も兼ねることが期待されていたから<sup>22)</sup>、英米人が中国語を学ぶためのテキストはそっくりそのまま英語を中国人に教えるためのテキストに転用できた。伝記作家グリフィスによれば「……ブラウン氏は、一八四一年に妻といっしょにシンガポールを訪れた七週間のあいだに、ジェームズ・レグ博士の『英語・マレー語・中国語辞典』にもとづいて、中国の生徒に英語を勉強させるための新しい教科書を編んだのである」という<sup>23)</sup>。グリフィスという『英語・マレー語・中国語辞典』は *Lexilogus* のことである。グリフィスの記述を信用してブラウンの手になる英語教科書が存在するとした場合、管見の限りながらそのような文献は発見されていない。もし今後発見されることがあれば近代漢語史、英語教育史、中国語研究史における重要資料となりうるだろう。

### 3.2 モリソン記念学院と『致富新書』

プロテスタント初の中国伝道に派遣されたイギリス人宣教師ロバート・モ

---

21) ただし序文を含めた *Colloquial Japanese* 本文にその旨の記載はない。なお *Colloquial Japanese* において *Lexilogus* の英語例文をそのまま使用している割合は全例文の70～80%ほどで、ブラウンが改変したものや独自に加えたものが20～30%あるという。本間（2018: 257-258）参照。

22) 千葉（2008）参照。

23) グリフィス（1985: 64）。

リソン (Robert Morrison, 1782-1834) の没後、その遺徳を記念してモリソン教育会 (Morrison Education Society) が1835年に成立した。しばらくは自前の教育機関を持たず、宣教師の私塾に金銭的な援助をする形を取った。そのうちの 하나가、ギュッツラフ夫人が自宅で経営していた私塾であった。この私塾は女子のみを受け入れていたが、モリソン教育会の援助を受ける代わりに共学化した。この時入ってきた男子生徒の一人が容闳であり、その自伝にはギュッツラフ夫人の印象も記されている。

なおモリソン教育会は1839年にブラウンを招聘してマカオに自前の学校である「モリソン記念学院」を開設するに至ったが、その施設には当時空き家となっていたこのギュッツラフ邸を使用したのである<sup>24)</sup>。

『致富新書』がモリソン記念学院において若いブラウンによる中国人啓蒙の計画の一環として行われたことは以下から疑いない。すなわち「孔子や孟子の書よりも現在の状況に千年あるいは二千年近い政治、経済に関する教科書が必要だと感じたブラウン氏は、その科学に基づいた入門書を準備して、それを中国語に訳し、一八四七年に広東で出版したのである」<sup>25)</sup>とグリフィスが記すとおりである。

『致富新書』に関するより詳細な記述は *Chinese Repository* 所載のモリソン教育会年報にみえる。「クラスの一人は『政治経済教本 (*Manual of Political Economy*)』を英語から中国語に訳した。書き終えてから彼は何度か書き直して中国人教師に修正のため渡した。……何人かの中国人教師に見てもらいよく読んでもらったから、その本は受け入れられると思う」<sup>26)</sup>。ここにいう『政治経済教本』が『致富新書』の原書 *First Lessons in Political Economy* を指すのは確実である。

この事業が可能だったのは翻訳を重視するモリソン記念学院の教育方針があった。卒業生や在学生在が通訳として中国の役所に登用されていることは学

---

24) この学校は Morrison Society's Institution, Morrison Academy などさまざまな呼称で呼ばれる。本稿では「モリソン記念学院」としておく。

25) グリフィス (1985: 66-67)。

26) *Chinese Repository* Vol. XV Dec. 1846, p. 608.

院の評判上重要と考えられたからである<sup>27)</sup>。モリソン記念学院の1846年の報告書には「これ [=英語の学習。千葉注] に加え、このクラス [=最上級クラス。千葉注] は前のどの年よりも多く、中国語から英語に訳すことを求められている。この目的のため、手に入れられる公文書やその他の公的な書類を彼らに用意した」<sup>28)</sup>とある。

しかし、一説にはこれがモリソン記念学院の没落を早めたともいう。香港史を詳述するアイテルの記述によれば、モリソン記念学院を含むいくつかのミッションスクールの生徒は、おそらく中英両語に通じていることに乗じて裁判で不正を働き、そのことが発覚して評判を大きく落とし、香港財界からの寄付を失う結果を招いたのである<sup>29)</sup>。この事件に関係した学校としてモリソン記念学院以外にも英華書院 (Anglo-Chinese College)、聖ポール学院 (St. Paul College) の名が挙げられているが、モリソン記念学院はこの不祥事に加え、夫人の健康を理由にしたブラウンの帰米、資金のショートといったうちつづく逆境を乗り越えることができず、1849年に閉鎖された。

『致富新書』の扉には「飛鷺山書院」とあるが、この飛鷺山は香港島の対岸である九龍半島に実在する山である。しかしブラウンが実際にそこに施設を構えた事実は確認できない。また九龍半島がイギリスの租借地として組み込まれるのは1860年のことであるから、当時中国の管轄にある飛鷺山そのものに何か教育施設を構えたとも考えにくい。『致富新書』の「飛鷺山書院」は、あくまでモリソンヒルに建てられたモリソン記念学院を指すと思われる。ならば飛鷺山書院の名は、モリソンヒルからの眺望によって与えられたのではないだろうか。当時のモリソンヒルからはヴィクトリア湾が一望できたというから、当然対岸の飛鷺山もよく見えたことであろう。

なお、『致富新書』の扉には「飛鷺山書院」の文言とともに「鮑留雲易編」

---

27) ブラウンの1844年3月29日付書簡には「現在登録されている生徒は三十名で、二人は欠席しています。この二人は上海で通訳として政府の御用にあっています」とあるという。グリフィス (1985: 73-74)。

28) Chinese Repository Vol. XV Dec. 1846, p. 608.

29) Eitel (1895: 281)。

という記載もあり、これがおおむね「ブラウン編」を意味していることは確実であろう。上述の通り、これまでの各種の見聞から「鮑留雲」がブラウンを指すことに疑いの余地はない<sup>30)</sup>。「易」はおそらく「変える(改変)」の意であり、「易編」で編纂を表すものと解しておく<sup>31)</sup>。

## おわりに

ブラウンは社会的・楽天的な性格と音楽の才能も手伝って宣教師・教育者として日中において顕著な業績を残した。教育者としての評判は来華前からあったが、アメリカ人ではなく宣教先の現地人子弟に教えるという全く異なる経験は、中国において中国人生徒と接することによって培われたものであった。また学校経営の面ではモリソン記念学院での苦い経験が日本での教育活動に反面教師として生かされることもあったかもしれない。

文献言語学の立場から見た場合、ブラウンの主要な貢献は *Colloquial Japanese* の出版にあるが、彼にとってそうした教科書執筆の経験は多言語教科書 *Lexilogus* の編纂協力が初めてであった。本稿ではそれを基礎に中国人学習者向けの英語教科書を編纂した可能性も指摘した。

重要なことは、そうした際にブリッジマン、ウィリアムズといった先輩格の来華宣教師および商人・政治家といった来華欧米人との交流が大きな助けとなったことである。ブラウンの日本への関心そのものがウィリアムズの薫陶による可能性があることは、先輩たちがブラウンのその後の人生に与えた影響を物語るものといえるだろう。来日宣教師は日本と欧米間の近代文化交

---

30) その場合、『致富新書』和刻本の序文が当時日本で伝道活動をしていたブラウンに全く触れていないこと、また日本で活躍していたブラウンもその伝道期間を通じて『致富新書』和刻本に全く触れていないことはやや不可解である。

31) 「易<sub>交易</sub>」が「訳」と粵語で同音(現代広州方言でともに [jik<sup>2</sup>]。ただし「易」は二音あり、「容易」の意味ならば [ji<sup>22</sup>] )であることを根拠に「易」を「訳」の意に解するという、いくつかの先行研究にみえる説は本稿では採らない。上述のようにブラウン自身が翻訳したのではなく、本人もそれを認めているからである。また「易編」の二字で edit や compile の翻訳語を意図した可能性もあろう。

渉を体現する重要な存在であるが、その事績をより丁寧に跡づけようとするならば来日以前の中国経験も検討することにより、さらに解像度の高い文化交渉の様相が描写できるだろう。

#### 参考文献

- ウィリアムズ, フレデリック・ウェルズ, 宮澤眞一訳 (2008) 『清末・幕末における S・ウェルズ・ウィリアムズ—生涯と書簡—』鹿兒島: 高城書房.
- グリフィス, W. E., 渡辺省三訳 (1985) 『われに百の命あらば』東京: キリスト新聞社.
- 佐々木晃 (1998) 「ヘボンの中国伝道 (上)」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』30, pp. 103-131.
- 佐々木晃 (1999) 「ヘボンの中国伝道 (下)」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』31, pp. 97-153.
- 千葉謙悟 (2008) 「“真の” 英語を求めて—19世紀中国におけるビジンと英語教科書—」内田慶市・沈国威編 『言語接触とビジン—19世紀の東アジア—』東京: 白帝社, pp. 99-120.
- 本間美奈子 (2018) 「S. R. Brown “Colloquial Japanese” の名詞—原典 “Lexilogus” にブラウンが加えた例文を中心に—」『大正大学研究紀要』103, pp. 243-258.
- 明治学院歴史資料館 (2009) 『明治学院歴史資料館資料集 第06集—アメルマン・フルベッキ・ブラウン・ヘボン・J.H. バラ史料集—』東京: 明治学院大学.
- 吉川雅之 (2011) 「レッグ編 *Lexilogus* に記される粵語音の表記と体系」『東洋文化研究所紀要』165, pp. 206-244.
- 容閔, 百瀬弘訳注 (1969) 『西学東漸記 容閔自伝』平凡社.
- 李丹 (2011) 《新教传教士与西方经济知识在华传播 (1800-1860)》《福建师范大学学报 (哲学社会科学版)》1, pp. 165-172.
- 李丹 (2015) 《晚清西方经济学财富学说在华传播研究——以在华西人著述活动为中心的考察》《中国经济史研究》3, pp. 43-53.
- 千叶谦悟 (2019) 《萨默斯《汉语手册》动词分析中的语气和时态——兼论十九世纪英国汉语教学及其实用性》《日中语汇研究》8, pp. 91-111.
- 千叶谦悟 (2021) 《萨默斯《汉语手册》所见的系词与存在动词述论》《文明21》46, pp. 1-12.
- 吴义雄 (2011) 《鲍留云与〈致富新书〉》《中山大学学报 (社会科学版)》3, pp. 88-96.
- 邹振环 (2020) 《舆地智环——近代中国最早编译的百科全书〈四洲志〉》《中国出版史研究》1, pp. 78-104.
- Anonymous (1832-51) *Chinese Repository*. Canton: Printed for the Proprietors.
- Brown, Samuel Robbins (1863) *Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese*. Shanghai: Presbyterian Mission Press.
- Brown, Samuel Robbins (1875) *Prendergast's Mastery System, Adapted to the study of Japanese or English*. Shanghai: Presbyterian Mission Press.

中国における S. R. ブラウンの活動

- Eitel, Ernst John (1895) *Europe in China*. Hongkong: Kelly & Walsh.
- Lazich, Michael C. (2000) *E. C. Bridgman (1801–1861), America's First Missionary to China*. Lewiston: The Edwin Mellen Press.
- Legge, James (1841) *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages: Comprehending the Vernacular Idioms of the Last in the Hok-keen and Canton Dialects*. Malacca: Printed at the Anglo-Chinese College Press.
- Williamson, G. R. (1848) *Memoire of the Rev. David Abeel, D. D. Late Missionary to China*. New York: Robert Carter.
- Wylie, Alexander (1867) *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

千葉謙悟 Chiba Kengo 中央大学教授 専門：中国語学